

篆刻家・山田寒山と阿賀路との関連

一、著名な篆刻家・寒山

押印には責任を明らかにする、書類上の必須の行為と共に、芸術活動上完成の証、またいうまでもなく作家自身の作である意を含む。

後者に着目すると、書画を問わず一流の作家は、よい印（雅印）を押している。具体的にいえば、紙面の大きさや作風に合致した印の使い分けをしている。一つ持っていれば全て足りると思っている様では、器量が知れよう。事実歴史に名を残す文芸作家の中には、百や二百もの印を集め残す例が少なくない。言い方は少し変わるが、骨董の辿りつく先は、「石」であるという。芸術の世界、とくに書画の分野で換言すれば、それを「印癖」と称す。

ただし印は寸法が小さいため、一般に理解し難く、作家が物故者になると、後日遺品中にあつたはずのものが見当たらなくなってしまう。使用印、専門用語で「自用印」と呼ぶものが発見される例は、確率的に僅少で、いつの間にか廃棄されることの方が多いだろう。

印の刻者を芸術分野では、篆刻家という。刻者は印材の右側面に自身のペンネーム（雅号）や誰のために、いつ刻したのかを、小さな文字で刻み込む。これを「側款」という。研究者や数奇者（コレクター）は、この部分を頼りに誰の刻かを判断する。わが国に中国から本格的な篆刻芸術が流入し発芽、徐々に篆刻家が出現し始めるのは、明治後半になってからである。今日研究上、明治大正期で注目を集める何人かの人物がいるが、本稿

に取り上げる山田寒山（一八五六～一九一八）は、その一人に数えられる。

岡村浩



図一 山田寒山

二、越後路との接点

この寒山研究は東京を中心とする国内研究と並び、新潟県下の資料を用いた地方文化との関連を主柱にする二極で展開されてきた。次に寒山と北越新潟との接点を列挙してみる。

①大正十一年（一九二二）出雲崎町に良寛堂が建った。良寛生家跡に地元郷土史家で俳人・篤志家の佐藤耐雪（一八七六～一九六〇）がリーダーとなって企画されたのだが、耐雪にこの建立を強くすすめたのが、寒山であった。

②寒山は「墨竹十万講」と称し、自分の得意とする水墨画、墨竹の揮毫を全国展開で行う企てを立てた。大正元年十二月発願、清国寒山寺への鐘を

送ることと恩人・伊藤博文供養のため日本寒山寺を作るべく、十年かけて百幅画会を繰返し企及しようとしたもの。いわば寒山の生涯中、ハイライトと位置付けられる事業である。その出発点、第一歩として北越を選んだ。

③寒山の来越は遅くとも明治三十六年（一九〇三）までにはあった。

新潟の地主や旦那商家には、風流を好み篆刻文化を含む書画文芸に関心を寄せる人々が比較的多くいた。これら受け皿になった人物は、全県下にと及んでいる。どこへ行っても窓口になる人がいた。寒山の足跡を辿ってみると、新潟や長岡都市部に止まらず、山間閑村とおぼしき土地にいたるまで広域にわたっている。先の佐藤耐雪との関わりも来遊を続ける中で知己になった仲で、それは大正四年（一九一五）頃のことだった。この年八月十九日には出雲崎町尋常小学校で良寛につき寒山が講演を行い、耐雪と会っている。八月二十日には耐雪の別邸「松涛山」で昼食を饗応し、良寛書一幅を耐雪は寒山に贈呈している（佐藤耐雪記録「用留」）。

④新潟市で知己となった同地の印判業（判子屋）木村竹香（一八六八～一九四三）の依頼に応じて刻した『羅漢印譜』は、多作の寒山刻印中の代表作として知られる。印のつまみに羅漢がかたどられた十六顆（か・印の数詞二個）、他三顆一式、計十九顆。さらに竹香の実子・正平を寒山は養子に迎え、自分の血統を世に残した。この「山田正平」となった竹香の子息は、のち昭和を代表する篆刻家の一人に成長し、現在でも非常に人気が高い。

⑤著名な割に弟子と呼ぶべき人物が見当たらない。派閥や団体結社に基づく自己主張より、個の活動があまりにも多領域の事業に及び、一か所に止まる日常が寒山には少なかった。偶々北越には来遊回数や滞在が長期に及んでいたため、唯一といって許されると思われる弟子が出た。それが津川正法寺の乙川大愚なのだった。次に寒山が訪れた津川と、そこで育まれた大愚の業績と評価に言及したい。

三、津川とは

津川町及び鹿瀬町・上川村・三川村の二町二村から構成された新潟県東蒲原郡（現阿賀町）は、平安末期以来、嘗て會津領に属し、明治十九年（一八八六）に福島県から新潟県に編入され、同二十二年に町制が施行されるにいたった複雑な時代背景を有す。津川はこの地の心臓部とも言うべき南北に伸びる新潟県の東端、その中腹に当たり、福島県との県境に位置している。当地は麒麟山を中心とする山々と、大河・阿賀野川沿いに開けた山河溪谷地帯で、「津川」の名が示す通り、水運で栄えた地であった。大正三年（一九一四）岩越線（今の磐越西線）が全通、そして大正末期には阿賀野川の豊富な水量を利用し水力発電所が建設され、大手化学工場が進出したが、それに伴い一方では、河川水運は衰退の途を辿ることとなる。これが寒山の来越した頃の状態である。

四、弟子・乙川大愚

乙川氏、本名貞吉。大愚、また白雲道人と号した。明治三十一年（二八九九）、新潟・横山貞夫の三男として生まれる。父は陸軍大尉まで務めた軍人であり、西南戦争にも出征し乃木希典の元、軍功を挙げた。

大愚は六歳で新潟西堀通の海嶽山宗現寺住職・乙川文獅の養子となり得度、新潟中学校（現新潟高校）に学んだ後、大正四年加茂の定光寺・乙川文龍に転師し、同寺に移る。次いで大正六年、永平寺で修行を行い、次いで忙しい時局の中、大正七年にはシベリアに兵役のため向かう。彼地での精密なスケッチが伝存しており、大愚の早期の芸事が垣間見られ興味深い。除隊後には鶴見の総持寺で修行を続けるとともに駒澤大学の聴講生となり、精力的に学問吸収に努めた。この上京中、名士文人と接触が行われ、自己の知見を広げていったといわれる。

大正十三年七月、二十七歳の時に津川の正法寺に迎えられた。昭和三十三年（一九五七）、白玉楼中の人となる。享年六十。

人となりは無欲恬淡、酒を深く嗜み、文人肌の力量を知る近隣の人々に囲まれ、風流韻事の生活に身を浸した。津川の他にも、隣接する村松町等近郷の趣味通を対象に「白雲会」「松雲会」を組織し、大愚を中心に清談

がもたれ、篆刻の手ほどきも行われた。

『書道講座』（⑥篆刻篇・二玄社刊）の巻頭に、棟方志功が篆刻の魅力について語った記述がある。就中、

昔から、わたくしは印が好きでした。絵を観ても、書を観ても印の方を先に見る程、印が気になるのです。画家でも、書方でも余り印の事まで想ひに乘せてゐる人達が少ないようです。……山田先生。石井先生。乙川先生。香取先生。保多先生方、現在、大いに御働きになってゐる方々の印を持つてゐます。数は随分あるのですが、中々その方々様の御仕事を本当に生かすというのでせうか、その方々の御作を輝し（ママ）様な絵や、板画が不足であります。……

とある。山田正平・石井雙石・中村蘭台、そして、次に名が記された「乙川先生」こそ、乙川大愚のことなのである。

篆刻家としての代表作は『篆刻般若心経』（昭和三年刊）が挙げられる。中央でも話題となり、一時的にその名が喧伝された。これは『印章世界』紙上に三年にわたって連載されたものを、編集者の依頼で単行本としてまとめた冊で、二六六字の心経を全六十四顆に分割。出版まで二回にわたり改刻した苦心の作。正法寺を調査した際、大愚が集め切り貼りの「印章世界」の自身に関する掲載記事をまとめた、スクラップが数冊残っていた。自刻印影と共に、『心経』出版にいたる内容を含む。

当時の様子に関し大愚の法弟の今川魚心子は『いしぶみ』（第三号・新潟拓本研究会刊）に「印人、正平・大愚、画人、靈山の思ひ出」（上）と題し、師の山田寒山と知己であった木村竹香・山田正平・大愚の交友関係を短文ながら活写しており、

乙川大愚は新潟宗現寺乙川文獅の弟子で私の法兄である。寒山が師匠の好意で、宋現寺滞錫中、正平と共に篆刻を学んだものである。正平はその後寒山の養子となって喜美子夫人と東京寒山寺に住居を構えていたが、大

愚は永平寺に修行に行き其後上京駒沢大の聴講生になり、縁あって津川の正法寺に住し、寺務の余暇に篆刻や、文人画、篆額なども趣味として刻っていた。

正平はその道で身を立てたが大愚は趣味として打込んでいた。だが、趣味や道楽の域に止まらず立派な作家であった。……

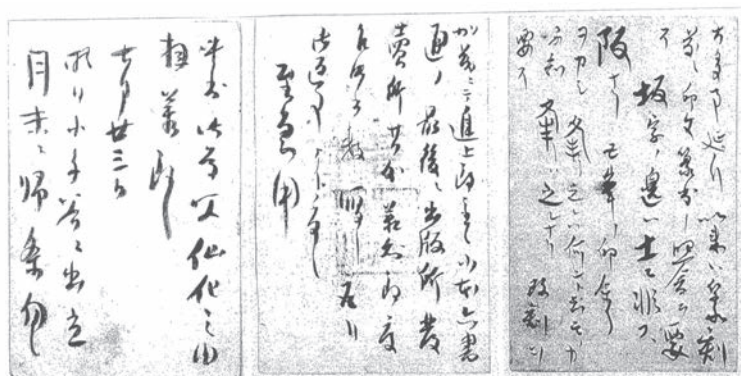
とあり、そして「思えばこの竹香と寒山の邂逅によって正平・大愚の巨歩的な印人が新潟に出現したのであった。」という見解を示している。

五、大愚宛寒山手紙

正法寺には、大愚が寒山の篆刻における嫡流であることの具体的証となる手紙が保存されており、その中から葉書を一文掲出する。

印文篆書ノ照會ヲ要ス、坂字ノ邊ハ士ニ非ス、阪ナリ、五峯ノ印余リヲカシ、（一字特記して）之レハ何ント云モノカ不知、峯ハ之ナリ 改刻ヲ要ス

と、「峯」字の篆書体につき、大愚が寒山より批正を受けている。これは、旧家で詩人・政治家だった坂口五峰の印を刻した際のことと思われる。五峰が好んで「阪」字を用い、坂口と記したためである。



図二 大愚宛寒山葉書三枚

続いて葉書の表を見ると、宛名は「新潟市西堀通七番町宗現寺内 乙川大愚様」とある。消印は大正五年五月十六日と明確に読み取れる。差出人は「三条山田寒山」と墨書している。

またこれより少し後、大正五年七月二十日消印の封書では、宛名に「加茂市定光寺乙川大愚様」、裏面の差出人はやはり「三条寒山」と筆記してある。略歴に記したように大愚はこの頃加茂定光寺に身を移していたが、そこと親しい新潟宗現寺にも随時往復していたのだろう。

他、寒山が大愚に宛てた葉書二枚には、

①「新潟市西堀通宗現寺 乙川大愚様（消印・大正五年五月二十六日）」

②「東京府西大久保四八七 乙川大愚様（消印・大正五年七月二十三日）」と宛名が記され、何れも発信者は「三条寒山」である。二通の本文を掲げる。

①加茂ニテ進上致置候 小本六書通ノ最後ニ出版所發賣所其外承知致度乍御手数御返事被下度候 至急用

②此度御尊父仙化之由拝承致候 七月廿三日
明日小千谷ニ出立 月末ニ帰条 勿々

①の書簡の内容は、加茂で寒山が修行中の大愚に進呈した字書『六書通』につき、その出版所・發行所を至急知らせよとの文で、東京を離れた旅先で様々問々ならない寒山の心理状況が短い言辞の中に表出されていると共に、そこには併せて、越後における寒山が如何に大愚に信を置いていたかのひとコマが投影されており、誠に興味が尽きない。僅か二枚の書簡から二人の師弟関係を通し、地方で慌しく過ごす寒山の動向がつかめるのである。

六、津川人宛て寒山書簡

寒山と大愚との交わりに関しては、早くに拙稿にまとめている。『阿賀路』（40集）を参照されたい。その後「阿賀町ゆかりの文人展」（H25・27）開

催により、新たに見出された資料も豊富で、今後旧稿を補記する抱負もある。その前に本稿で特筆したいのは、次に掲示する津川人宛て寒山書簡（手紙）の紹介と分析である。

①拝啓 本日野口寧齋先生ヲ訪問 貴意ノアル処茶話致置候間 早々御依頼被下度 先生も早速詠進可致様被申居候
九月廿五日（M37・9/25）

②貴書委細承知仕候 詩箋下画永坂先生ハ迎モ間ニ合兼候ニ付 寺寄廣業氏ノ菊持含有之候ニ付上木致候 刻料壹円菓子ノ類ハ来ル八日夕六時迄ニ御報願上候 諸費御豫等同日迄ニ御送付願上候檜円関印ノ儀モ可申上候（M37・10/12）

③啓 昨夕寧翁ヨリ來書左ノ通り出来早速木工へ相命候 酒香九月九日城址黄花黄雲吊古斜陽淡々登高落木紛々 吊古会諸賢教正 寧齋印 印菓印ハ吊古ノ二字 是ハ小生ニ御任せ置被下候（M37・10/2）

④電報着十三日出郵可致 都合ニヨリ三箱ヅツ一封トシテ差出候 七箱ニ相成候得者外箱ノ用意又々費用ヲ要シ候ニ付此了知願上候 十月十二日前十時（M37・10/12）

⑤尊書并一元三留君御化縁之分只今正ニ奉収修候 御尽力之程奉謝候 御申聞之件々ハ正ニ拝承仕候 石印ハ可成早々調整可致候 都下紅塵万丈風流俗事往来多々 卑書へ赦すを御請迄（M37・10/25）

⑥尊書并小包正着 御菓子御投与仙味辱奉拝受候 盤高先生ノ印再度 寸法ニ間違 何トモ申訳無之 勿々中ノ疎忽御寛恕願上候 早速相改差出可申ニ付同先生へ御話被下度候 次ニ肉池ノ御求承知仕候 其内調上可仕候

石球先生ハ已ニ帰京相成候 詩箋ハ菊画ハ六ヶ敷趣一寸申上候并ニ碑文

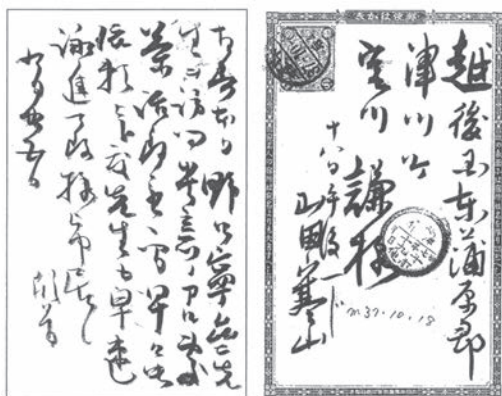
ノ事ハ願入置候（M37分・月日不明）

発信年月日を確認すると、明治三十七年九月から翌月分までで、期間は集中している。交わす用件が、両者の間にあったのだろう。

重要な視点として、これが「墨竹十萬講」以前に当たることで、寒山が大正期にいきなり各地を巡遊しようとしたものではなかったことの裏付けになる、資料性が高い書簡であることが指摘できる。掲出の六通の他、明治三十七年十月十二・十八・二十五・同三十九年八月二十九日を加え、計十通が伝わった。

受信者の津川町・宮川謙は山間部鉾山開発や林業経営とつながりそうなお、火薬業を手広く商った旧家。津川町横町にあった。屋号「三国屋」。草倉・足尾銅山開発のため「ハツバ」、鉱道を掘削するために火薬が多用された当時、この地で活躍した人物ときく。

書簡内容は当地古跡探勝会「甲古会」の求めにより、書と画が一緒になった画賛形式の詩箋を三種作成することを宮川氏が提案、寒山に依頼したのだった。時の漢詩人の大御所である野口寧斎、永坂石埭、絵は日本画家で東京美術学校教授にこの頃就任した寺崎廣業等、在京一流の文士によるものを周旋したのが寒山らしい。今からみれば、地方の一仕事に対して実に豪華な人物の動員、紹介だといえる。加えて書簡の行間には相手の宮川氏や三留氏その周辺に、刻印依頼をはじめ、印を刻す前の配字（布字）下書きの印稿・印を押す道具の印矩・朱肉・刻印を型押しした茶葉等を求めら



(①文) 図三 宮川謙宛寒山葉書

れ、それに熱心に応じている。寒山の手広い諸行に理解を示す人々がいた証左が読み取れよう。つまり山間地といえども、ここ津川には、印材周辺に関する特別な趣味の鼓吹を受け入れるよき理解者が、まとまって存在した風土を看取できるのだった。図四の印影は、その印文の姓名と地名から、これら津川人のために寒山が刻したもので、地元集押された形で残っていた。



図四 寒山刻と思われる印影(縮小)

参考までに、書簡に登場した各人の略歴を綴る。

永坂石埭（一八四五—一九二四）

明治大正期を代表する漢詩人。医家でもあった。名古屋生。明治初めに上京、時の詩壇の首領・森春涛門下の四天王となる。丸みを帯びた書風も一般によく知られた。

田口米舫（一八六一—一九三〇）

栃木県生。書道研究分野の一つ、金石学に精通し、三年余り本場中国に渡って書学を修めた。日本書道作振会審査員。

野口寧斎（一八六七—一九〇五）

長崎県諫早生。漢詩人。詩をよくした父と共に上京、森春涛・槐南父子

門になる。小説批評等幅広い文芸活動を通し、森鷗外や巖谷小波・乃木希典をはじめ多くの著名人と親交。

なお書簡にあった詩箋だが、版木が三種現存し、別に地元人のオリジナル製品と思われる一種も伝わる。併せて図五に示す。文面のやりとりと併せみると、始め①文では野口寧斎に依頼し受諾のあった漢詩の担当者は、結局山田寒山自身の作に変わる。詩の背景の画も、②文では永坂石埭の筆によるものが間に合わず、寒山持ち合わせの寺崎廣業の菊画を用いると予告。しかし現物では、田口米舫作にまた入れ替わっている。米舫は寒山代表作『羅漢印譜』題簽(タイトル)を書くなど、寒山と交わりの濃い存在だった。何れにせよ、当時の東都における寒山をとりまく詩人・画家の多彩さに興味を覚える。皆著名な文人揃いで、中央を離れた辺境の地で、何ゆえこのような周旋を行ったものか。おそらくは「山師」とも越人に評されたという寒山の、一種の大風呂敷を広げるやり方で人々を驚かせるねらいと共に、寒山にとって、あるいは他の文士にとっても、今程は中央優先の時代ではなかった。各地方の文人にしばしば江戸上方の大物の門人が輩出されているように、地域の文化嗜好は点々と結び付き、かの「文人墨客」の呼称の通り、名家師承の方も競って各地に出張したのである。

七、弔古会専用詩箋

続いて詩箋を鑑賞してみる。

①「剣気如霜白、英名似菊芳、麒麟山下客、高会古重陽、弔古会諸賢正是寒山」(剣気は霜白の如くして英名は菊の芳しに似たり。麒麟山下の客、古重陽に高会す。弔古会の諸賢、是を正せ。寒山)

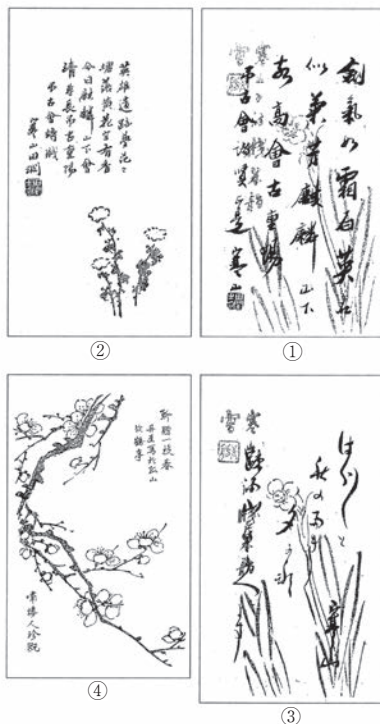
②「英雄遺跡夢茫々、墟落黄花空有香、今日麒麟山下会、清尊長吊古重陽弔古会詩 寒山田潤」(英雄の遺跡、夢茫、黄花墟落して空香り有り、今日麒麟山下に会い、清尊長吊、古重陽。 寒山田潤)

③「はらはらと秋の雨さく夕かな 疎不山房主人に寄す 寒山」

以上三種について、①③は田口米舫画を用いた版木刷に、寒山が詩と句

を直書した詩箋の使用例。②は寒山の詩と画を用いて作成した、木版刷詩箋。この寒山の詩から察するに、津川で明治後半「弔古会」——いにしえの魂をとむらうつどいが結成されていた。重陽、九月九日に麒麟山下を会場とするもの。となれば「弔古」とは、輩名氏家臣・金上氏が築城したと伝わる山城を舞台とする、中世戦国武将達の攻防、栄枯盛衰にちなむ行事であったかと推察する。明治三十七年は、輩名氏が滅びて四一五年が経っていた。

別にもう一枚、梅花作一枝を図柄にし、右上部に「聊贈一枝春 丹厓写於孤山放鶴亭」、左下に「嘯樓人珍翫」と文、書の入った詩箋。「孤山」とは麒麟山、その山麓の「放鶴亭」で、丹厓なる人物が書画の作者らしい。多くあった妓楼の主人が、「嘯樓」と名乗る者の所蔵書画を用いてこの詩箋を作ったのだろう。寒山関係者ではないように思われる。



図五 寒山作詩箋四枚

八、別の資料から

宛名の宮川氏の元には、書簡と別に長く親しく寒山と付き合った痕跡があった。旧蔵品中、寒山作成書類中未公開と思われる、とくに関係資料で看過出来ないものを最後に紹介、分析する。それは、伊藤博文が山田寒山

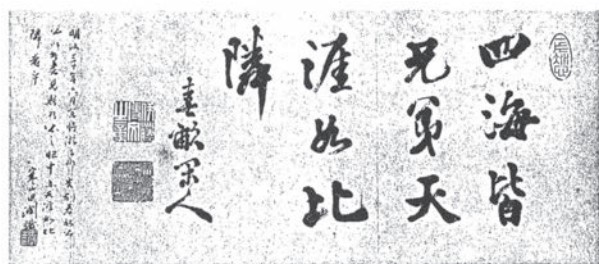
に授けた書「四海皆兄弟天涯如比隣、春畝閑人」(「春畝」とは博文の雅号・ペンネームをさす)を絵葉書にしたもので、下半には活字で、

明治三十年ノ春余支那ニ遊ハント欲シテ留別ノ詩ヲ以テ伊藤公ヲ大磯滄浪閣ニ訪フ 時ニ伊藤公此書並ニ明人呉軾所製ノ古寶墨一枚トヲ以テ余ニ贈ラル 爾來行脚中ニ収メ致ル處之レヲ横披ノ額トシ掲ケ讀ムヲ常トス 帰朝後明治三十六年新潟宗現寺ニ遊ヒ錫ヲ留ムルコト壹百餘日 去ルニ臨ミ住持乙川文獅和尚ニ留與ス 後チ文獅和尚ノ本師加茂町定光寺先住乙川文山禪師ノ有ニ帰ス 今現ニ同寺ノ什寶タリ 余今定光寺ニ客トナリテ新年ヲ迎フ 十三年後再ヒ此書ヲ見ル 頗ル懷舊ノ情ニ堪ヘス 即チ一偈ヲ賦シテ現在乙川文龍方丈ニ呈ス 偈ニ曰ク 寒山四海皆兄弟 春畝天涯如比鄰 六十一年身是我 囊中無物亦逢春 日本寒山寺建立墨竹十萬講化緣 全國漫遊ノ第一着新潟縣加茂町定光寺室中ニ於テ

大正五年一月一日 寒山 山田潤

とみえる(図六)。これによって大部、点と点とが結びつけられた感がある。先述の通り当時寒山は、東京に寒山寺を興す資金を集めるため東奔西走し、諸家の後援を得、墨竹画賛揮毫会を各地で行うことを立案していた。津川には乙川大愚宛寒山書簡も数通伝わっているが、同じ大正五年五月十六・二十一日・七月二十二・二十三日付で、皆差出人は「三条寒山」、三条市極楽寺を根城にしていた時の署名。図六の絵葉書によれば、それから三条を切り上げて、加茂定光寺で越年をしたのだった。一方宛先の大愚住所は、新潟市西堀通七番町宗現寺内と加茂定光寺の二寺となっている。

その後、寒山が県内で書き上げた墨竹



図六 寒山制作絵葉書

の量は測り知れないが、翌々年の大正七年(一九一八)、東京下谷区にて六十三歳の生涯を閉じた。ちなみにこの年一月、大愚は日本第一道場と称す永平寺に修行の身であった。

九、おわりに

総論として、「講」「無尽」等で昭和戦前期まで書画の周旋が一般に行われていたことは、新潟の場合、他の文士の活動例にも多く見出せる。しかし「十万」と誇張した数字は他例がなく、寒山に「山師」「畸人」と世評がある所以であろう。ただそういった壮挙企図の「第一着」に北越を選んだことは、幅広く著名人と交わった寒山ですら、それを可能にし得る環境が北越にあらばあると見込んだためであろう。

先行研究に基く「寒山年譜」に加え、この「墨竹十万講」に関し、大正四年から六年の事績で判明したことを巻末にまとめ、結びとする。

なお宮川家は、麒麟山酒造の近く石川医院の並び、横町にあったが、遅くとも平成十二年三月には、黒塀に囲まれた家屋は解体されて跡形もない。解体時、郷土史家・徳永次一氏は許されて家屋に入られ、いくつかの資料の譲渡を受けた。本稿執筆に当たっては、徳永氏から生前に頂戴していた宮川氏宛寒山書簡コピーを使用した。記して謝意を呈したい。

山田寒山略年譜

安政三(一八五六)七月、父山田丈助と母貞参尼の子として生まれる。本名・潤子。堂号は芝仙堂・風火仙窟。

慶応二(一八八六)十二歳 熱田・円通寺にて得度。曹洞宗永平寺派。

明治十九(一八八六)三十一歳 三重県最明寺を辞し、大阪寒山寺へ。この頃までに長崎の印人・小曾根乾堂、伊勢の印人・福井端隠に篆刻を学ぶ。

明治二十八(一八九五)四十歳 東京三田芝公園内に移住、芝仙堂と号す。

明治二十九(一八九六)伊藤博文主催「滄浪閣落成詩会」に参加、知遇を得る。

明治三十(一八九七) 中国に渡り蘇州寒山寺住職に四ヶ月程就く。
 明治三十二(一八九九) 麴町に「陶友会」を開く。養子・木村正平、新潟に生まれる。

明治三十四(一九〇二) この頃向島へ。

明治三十六(一九〇三) 四十八歳 新潟へ百日程滞在。新潟の印人・木村竹香の求めにより羅漢鈕陶印等十九顆を一気に刻す。

明治三十七(一九〇四) 四十九歳 この年九月から三十九年八月日付の宮川謙宛書簡を発信する。

明治四十(一九〇七) 五十二歳 岡本椿所・五世浜村蔵六・河井荃廬・初世中村蘭台等と丁未印社を創立。

明治四十一(一九〇八) 四月、木村竹香が『羅漢印譜』(一帙二冊)を刊行。
 明治四十三(一九一〇) 五十五歳 夏に寒山寺新鐘完成。秋、甲乙丙三種の新鐘分身頒布を企画。

大正二(一九一三) 五十八歳 分水町地藏堂の富益齋著『印章備正』を校訂刊行。

大正三(一九一四) 六月、神戸港から新鐘を蘇州寒山寺へ送る。木村正平、上京。

大正四(一九一五) 六十歳 翌年にいたるまで「日本寒山寺建立結縁墨竹十萬講募縁」のため、越後へ。

大正四年(一九一五) 八月十九日 出雲崎町尋常小学校で良寛につき講演。前日佐藤耐雪と会う。八月二十一日「山田寒山氏来訪に付 松涛山にて中食を餐応し 良寛上人書 一幅を寄贈す」(出雲崎町佐藤耐雪「用留」より)。この年加茂定光寺にて山水画制作。これを翌年秋、乙川大愚に与える。

大正五年(一九一六) 一月越年 加茂定光寺に滞在。五月十六・二十六・七月二十二・二十三日付乙川大愚宛手紙を三条より発信。七月二十四日、小千谷。夏、三島郡寺泊にて墨竹六曲一双屏風を揮毫。夏山田東洋・八百板菖城等計四名の合作を行う。

大正六年(一九一七) 一月五日三条極楽寺に良寛遺墨遺什展を開催。五月十五日立原杏所を模した自作に箱書。三条極楽寺滞任、一年半に及ぶ。五月三島郡島田村(和島村)で良寛遺品水滴に箱書。七月村杉温泉にて武石

貞松と賦詩す。同地での詩碑建立につながる。八月一・二日出雲崎円明院において良寛研究会。八月一日「山田寒山師来訪せらる 明日良寛研究会開会を約す」(佐藤氏「用留」)。十月一日 東三条滞任。「東三条の山田寒山師より良寛の師匠有願禪師の筆雲龍壺軸寄贈せられしにより礼状遺す。」(同上)。

大正七(一九一八) 六十三歳 下谷区下谷町で没す。木村正平、寒山の長女・喜美子と結婚し山田家を嗣ぐ。

大正十三(一九二四) 寒山七回忌のため『羅漢印譜』を再刊。

主な参照文献

「山田寒山・正平展」(H4・篆刻美術館) 図録
 「山田寒山と寒山寺鐘をめぐる」柴田光彦(H5・書道研究) 54号所収
 『良寛堂建立の記録 佐藤耐雪の「用留」を読む』(反町タカ子著・H24刊)